

行つた、少し歩を早める、淨水場を左り三四丁行くと、左側に「十二社へ二町」と札がかゝつてゐるので、細い小路に入つて行く、こゝへ來るともう都らしくない、青麥の畑がある、茅屋が軒を並べて、鶏が長閑な聲を立てゝ居る、茅家か五六軒で盡きた、畑の中の細道をうれり行くと森が見える、森へ入ると十二社が。

落葉を踏むと其下に霜柱がぐさと崩れた、もう解けかかつて居る、本社の後から前に廻つて、下駄をぬぎ棄てゝ社殿に上つた、貧乏財布を探つて賽錢箱に投ずる、氣味のいゝ音がした、太い繩の附いてる鈴をガラン／＼と鳴して眞面目に額つく。

神殿の御洗鉢や冬椿

御手洗の厚き氷や今朝の春

仰き見る松や松子に春立ちぬ

神庭や落葉の中の霜柱

恍惚として我に返へると二人は居ない、今迄御手洗の厚氷をいぢつて居つた筈だと、四邊を見廻した、影も形も見えぬ、池の茶屋にはよもや這入るまいと思つたなれど、若しやと入口に行く、と、入らしやいと艶めかしい茶屋女、これはたまらぬと早速引返へして社の後へ廻つた、居らぬ、笹原があつて直ぐ下は崖だ、清らかな流が寒げに音立てゝ居る、霜柱の道を拾ひ歩きしながら、境内を通りぬげ様とあせる、一方は飲食店で一方は池だ、池には藍をたゝへて、枯葦が處々に背高く風にゆらいでる、飲食店の盡きる處に、女瀧と高札がかゝつて、男は入るべからず

とある、つまりぬ瀧だ、岡の下を二人の女が泥路になやみ乍ら歩いて來る。

霜解や足袋をあはれむ朝詣

女と行き違ひに岡に上つて行くと、二人は盛んにスケツチをやつてるので、我も道具を開いた、入らつしやいと面喰つた茶屋が池に倒映して頗る美しい、下書を取つてると、茶屋の屋根の上に梯子が現われた、間もなく人が登つた、はゝア消防の出初めだなと氣か付いた、一時間餘は無言の業、やつと十六切一枚寫生を終へて、冬木立の間を通り畑地へ出る、五六町にして橋がある、下を流れてる水は玉川の水だ、羽村から別れて來るのだ、川の兩側は一面に畑で、茶や桑の樹が所々に割據してゐる、畑中の一ツ家の前に夥しく大根が干し掛けてある、富士がよく見えて感じのいゝ畫題だ、枯草や枯枝を集めて路傍に焚火した再び三人適當の位置によつて寫生し始めた、左手の方から坊さんが二人きて前を通つた、八百屋が右手の細道を曲つて行た、東條君が出來たかと思に來る、松浦君も出來たとやつて來る、我れもどうかこうかごまかしたので、イザと焚火路を踏んで歸路についた。(孚明)

或る日

神奈川 加須美生

冬の暖かい日、反町裏の豐顯寺へ通する道より、右手へ少し下

りて柔かい枯草の中へ畫架を立て、自分は三脚なして稻叢へ
 靠れ懸かりながら前に有る稻叢の二ツ三ツと、中景の農家と、
 其の後の霞んだ山を小さひ畫面に入れて寫生しかかると、近く
 て風あげに餘念なかつた小供等が五六人、風を下ろして直ぐ寄
 つてくる、「やあ寫真を描い居らあ」と一人が言へば、「あら一チ
 ヤン處、の家を描いて居るよ」と彼の農家を指さして云ふ、傍
 を通る人が皆立止つて見て行く、西の空が少し黄ばんで彼の家
 も少し霞できた頃、夕ツチを入れ終つてパレットを洗うて居る
 と、田の向から友が一人、三脚をふり廻わしながら「やつてる
 のかれ」と聲を懸ける、「最う仕舞かれ」と、すぐ畫架のそばへ寄
 つてきて畫面と向ふを見くらべて、「一寸此處も善い處だれ、僕
 はそら彼處の森を描いたよ」と、今描いた家の左手の森を指さし
 ながら、スケツチ箱を開けて見せる、豆腐屋がりんをならして
 わきの道を通つて行く、「君最う歸へらうじやないか」と、友
 をうながして畫架をたゝむと、彼の家からポト白く夕煙が上
 った。

日本水彩畫會新會友

福岡縣三池郡渡瀬	山口
新瀉縣三島郡出雲崎町	高橋浦次郎
栃木縣日光町鉢石町	星野長一
福岡縣鞍手郡木屋瀬町	立石録太郎
大阪市東區農人町二ノ七十五	大隅直造

御わび

十二月の末に、年賀状は一括して特別扱に托し、伊豆に旅行し
 て歸つて來たのは一月の七日、翌朝、諸君からよせられた澤山
 の賀状を拜見してゆくうちに、まだこちらから差上ない分を區
 別して見たら、實に四五寸の高さに達した、確に三四百枚はあ
 りませう、その中には叮嚀な繪の畫いてあるのも少なくはない、
 そしてその多くは未見の方であつて、多分本誌の愛讀者諸君と
 推察し、御厚意を深く感謝しました、それで、宿所の分つてお
 る方へは、早速に答禮を申上るつもりでゐたところ、留守中の
 雑務はある、來客はある、新年會だ、送別會だ、晚餐會だ、何
 の角のと事繁く、一日々々と延引してゐるうちに、最早本誌二
 月號の編輯の時が來てしまいました、正月も半なかばを過ぎた今日、
 年始状であるまいと（實はあまり澤山で手のつけられぬので）、
 今年に此誌上で御わびを申上て置いて、諸君に失禮いたす事にし
 ました、あしからず御許容を願ひます、諸君の賜はりし御賀状
 は、永く保存して、御厚意はいつ迄も忘れませむ。

四十三年一月

大下藤次郎 敬白